

再処理と核不拡散

— 使用済み燃料乾式中間貯蔵と 余剰プルトニウムを考える —

フランク・フォンヒッペル、マイケル・シュナイダー 講演会

日 時：5月20日（月）18時30分～20時30分

場 所：連合会館201号室（旧総評会館）（千代田区神田駿河台3-2-11）

J R：中央線・総武線 御茶ノ水駅（聖橋口）

地下鉄：新御茶ノ水駅、小川町駅、淡路町駅（B3出口）

資料代：1,000円

◆プログラム、地図、プロフィールは裏面に記載。

原子力市民委員会(CCNE)は、脱原発社会構築に向けた政策提言を行う市民シンクタンクを目指し、2013年4月に設立されました。この度、日本における核廃棄物に関わる政策検討の一環として、委員会の「核廃棄物部会」の企画による公開研究会(講演会)を開催します。

フランク・フォンヒッペル氏とマイケル・シュナイダー氏は、「国際核分裂性物質パネル(International Panel on Fissile Materials:IPFM)」の共同議長及びメンバーとして、核不拡散の観点から、核分裂物質の低減を追求し、再処理政策からの撤退と、これに伴う対応策を国際的に提言しています。

今回の講演内容の一つは、「使用済み燃料の乾式貯蔵問題」です。再処理の推進派は、原子力発電所のプールが満杯になってきているから、六ヶ所再処理工場の運転を開始しなければならないと主張します。両氏は、プール貯蔵よりも安全な「乾式貯蔵」への早急な移行を、代替案として唱えています。原子力委員会は、昨年、使用済み燃料の直接処分の研究の必要性を再提言しました。長期的な貯蔵方法としては、乾式貯蔵が有効とされています。フォンヒッペル氏からは、使用済み燃料の乾式貯蔵方式について、技術面や経済面から話を伺います。

もう一つの内容は、「余剰プルトニウム」への対応です。フランスの原子力依存度低減策では、MOX燃料を消費できる原子炉が閉鎖されていきます。フランスは、自国の所有するプルトニウムの消費だけでやっとという状態です。そうすると、日本のプルトニウムをフランスでMOX利用する可能性はなくなります。現在、英仏にある日本のプルトニウム約34トンをどうすればいいのか。フランスの政策転換の意味について、シュナイダー氏からお聞きします。そして、フォンヒッペル氏には、プルトニウム処分の技術的側面についてお聞きします。

お二人の提言は、核廃棄物という問題に取り組むうえでの有益な示唆を与えてくれることと思います。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

